

すぎなみソーシャルデザイン塾 第二章 「地域みんなの学校づくり」

06年11月29日 学習支援者 三井物産戦略研究所 新谷大輔

テーマ：ロールプレイ・ワークショップ 「教育プログラム・指導者から考える」

<はじめに>

9月20日から始まった第二章「地域みんなの学校づくり」の講座の締めくくりは、本日のテーマに沿って、キャリア教育に焦点を合わせ、考えていきます。

- ・ 地域で暮らす皆さんが学校に関わるという関係性があるのか
- ・ キャリア教育に対してどういう参加の仕方があるのか

この二つが論点と考えますが、現実の学校は、教育内容の中立性や防犯の点から外部の人を入れたくないということになって、地域から遠ざかることになりがちです。

学校教育は基本的に先生が知識等を生徒に教えるものと理解され、これに家庭教育が加わることによって成人になり、また成人になれば自主的な社会教育という環境で学んで大人になっていきます。しかしながら、年々家族で暮らす時間が減っていく風潮のなかでは、学校教育の役割が一層大きくなっていると考えられます。

今回は、学校の中身である授業内容、先生に集約されるものを議論の対象にします。

キャリア教育、職場体験プログラムに絞って考えていく背景としては、平成17年度から杉並区の中学校で先進的に進めている5日間の職場体験授業を具体的な事例として皆さんと議論ができることからです。

<キャリア教育の基礎資料>

三井物産戦略研究所機関誌より「しごととソーシャル・キャピタル」(新谷大輔著)

の記事を抜粋

キッズニア <http://www.kidzania.jp/>

東京・豊洲にある子供が職場体験できるテーマパークで警察官、消防士、コックさんなどになって働くことができる、給料をもらう、買い物もできる、このように実社会をそのまま体験できる仕組み。目を輝かせながら憧れの仕事を体験している。この事業は、意思決定力や結果に対する責任、広い視野などバランスの取れた基本的資質の育成を目的にしている。

キャリア教育とは

児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てる教育

親の役割

自分の子どもに自分の仕事を誇らしく自信を持って語れること、それが働くことを子どもたちに教える家庭教育の出発点であり、キャリア教育につながるものとなる。

1. 仕事と地域

仕事から得た経験、知識、見識等を仲介して地域に関わり、役立てたいという皆さんに参考になるのがキャリア教育という授業です。今、学校では「仕事と教育」ということを真剣に考えだしています。

本日は、ビジョナリーエクスプレスの小寺良介さんからキャリア教育について話を聞きます。同社は、子どもの未来創造協会を発行人として、『kanae´・カナエ』（小学校 5 年生向けのキャリア教育情報誌（フリーペーパー））を東京都・横浜市・川崎市の学校を通じて配布しました。従来では考えられないような動きです。

私としては、このような情報誌を現場の先生がどのように使いこなすのかということに興味を持って見守っているところです。

<小寺良介さんの話>

- ・今まで親は子どもに、いい学校に行きなさい、いい学校に行けばいい会社にいけますと言っていた。
- ・いい会社とはどのような会社ですかと自問すると、社会変化によっていい会社像が見えない。仕事をするようになって考えた、
- ・いい学校とは仕事を得るための準備期間で、学校の目的は働くことの手段ではないかと考えるようになった。大学を卒業してもしたい仕事分からない人が多い。
- ・それなら、働く目的を早くきめて手段を講じることが必要と考えて『カナエ』を東京都、横浜市、川崎市の公立小学校約 1,800 校に配布した。自分はこのような仕事をしたいと自分できめられれば、楽しい学校生活になるのではないか。
- ・編集方針

どんな大人になるのか想像させる

大人の見識を見せる

企業が子どもに提供できるプログラム情報を出す

某社の新人研修プログラムを子どもに体験してほしい。新人が働くことをリアルに体験する。しんどいと思うか、楽しいと思うか子どもの感性で感じて欲しい。そして自分に合う仕事感を見つけて欲しい。

1998年にスタートしたビズ・キッズについて

小学校高学年生が実際のビジネスを体験するプログラム。銀行からお金の融資を受ける、商店の協力を得て商品を仕入れる、販売する、収支計算書をつくる、出た利益を何に使うかを考える。働いている両親・保護者等の苦勞を理解するようになる。ものを考える瞬間が見えてくる。

例示：ものが売れない、声をかける、それでも売れない、商品を見せて誘う、自分で工夫する、考える。

狭山商工会議所の狭山ビズ・キッズの例は入間小 5 年生が参加。入間川七夕通り商店街に出店し販売する。

狭山ビズ・キッズ参考情報:

http://www.city.sayama.saitama.jp/kouhou/pdf/0612/0612_16-17.pdf

仕事に関する両親等の意見は一点主義で、選択肢の巾がある意見を言うことは苦手である。両親等を支援するのが『カナエ』で、学校が興味を持ってくれた。学校の考えていることが分かると企業が興味を持った。

学校周辺の大人の支援、『カナエ』情報誌発信の工夫、プログラム開発に対して企業の資金提供、子どもに対する気持等の組み合わせが起きてきた。学校も、企業も変わると考える。

『カナエ』の企業広告他について

物販広告は掲載しないが、広告とみなされない掲載物を考え出す。

アンケートに応募する小学生の中には反応のよい子どもがある。この子どもたちを紙面づくりに参加させたい。

2. 杉並区におけるキャリア教育について

< 中曽根さんから資料説明 >

区立大宮中学校では、他の区立中学と同様、昨年度から五日間の職場体験を導入、総合学習の单元などをフルに使い継続的な学習プログラムとして「キャリア教育」を実施し、その成果を冊子（経済産業省の委託事業『地域自律・民間活用型キャリア教育プロジェクト』の資金を得て実施）* 1 にまとめている。

・ 杉並区立大宮中学校のキャリア教育プログラム

《事前事後の活動に重点をおくキャリア教育の冊子* 2 を開発》

《狙いは、先生以外の多様な大人との関わりを持つ場をつくりだすこと》

1年生：自分史新聞の作成(自分をより理解する)と職場訪問(働く人から直接はなしを聞きはたらくことを意識する)

2年生：経営人の話を聞く会・マナー講習・職場体験(5日の職場体験により働くことの意義や大切さを知る)・課題探求プログラム(職場体験先から事業課題を頂きその課題解決をするための調査探求をする、解決策を発表する)

3年生：古都人訪問(修学旅行)

伝統文化を守り続ける人々にインタビューしそれぞれの想いを知る。

* 1 『JOB JOB』(フリーペーパー制作)

職場体験をした中学生や指導教諭が、「(株)ソシオエンジン・アソシエイツ」や「NPO 法人学習環境デザイン工房」などの協力を得て編集した冊子。

* 2 『職場体験学習プロジェクトブック～課題探求プログラム』

発行人 大宮中学校長・副校長

職場体験先から頂いた課題を探求するための課題探求プログラムである。

第一ステージ：体験の準備をする

第二ステージ：体験する

第三ステージ：課題を受け取り情報収集し、課題解決の企画を立案する

第四ステージ：プレゼンテーション方法を学び発表する、振り返り自己評価をする、お礼状を書く。

このプロジェクトブックは、3年間の学習プログラムとして構成されていること、
どのような社会的な課題からキャリア教育が必要とされているのかを考えるようにして
あることが特徴である。

<新谷さんから>

先ほどお知らせしたビズ・キッズ事業は、企業を起こす際のポイントは「なにか」という
起業教育に重点をおいている。売り買いを通じて体験的にお金の価値を知ることで、世の中
になぜこのような仕事があるのか子どもは理解する。

一方、杉並区のキャリア教育では世の中にどのような仕事があるのか、仕事と仕事があ
るように「つながっている」のかを理解させる。つながり、社会の仕組みを学ぶ。

二つとも民間企業が触媒となって企業の社会貢献として協力している。

3 本日の課題を議論する

先ほど、小寺良介さんは、こどもの未来創造協会が発行する「カナエ」情報誌について
話されましたが、では、この『カナエ』や『JOBJOB』などをどのように使えば、地域の
人々が学校に関わるのか、関わった結果、学校がどのように変わるのかを各グループに
分かれて議論してください。

- 親はアルバイトするくらいなら勉強しろとっている。子どもは恐ろしい程社会の現実
を知らない。学校情報の中で自分の将来を探すことに親として不安を感じる。このよう
な情報誌があれば、子どもは世間を知る機会となる、評価する。
- 夫が仕事に関連するキッズニアの取り組みについて話していたことがある。まだ試行段
階であると判断しているようだ。企業広告の一環として考えるのか、企業の社会貢献策
の一つとして考えるのか。

社会貢献策と考えるとして、「どこか」「なにが」貢献するところなのかが整理されてい
ない企業が多いかと思う。しかし、地域の企業経験者（OB/OG）なら自分のスキル、考
え方等を学校で披露することは可能で、積極的に行動してもいいと判断する。

- 「経済産業省のキャリア教育プロジェクトの資金がある」「意図はこういうもので、こ
んなものを制作したい」等の情報が学校から地域に入れば、もっと地域の力が集められ
たのではないかと。地域に経済系の情報を受け取る受け皿が少ないと思う、地域の課題で

はないか。

- 学校等から得られるメリットはどのようなものかを企業は理解しているのだろうか(まだ模索中のように思える)。企業が評価する観点等が、学校、地域や NPO に伝われば、お互いをもっと近づける筈。小寺さんのような会社が、当面仲介役となるのか。
- 『カナエ』の広告主に第一次産業、第二次産業が少ない、ものづくり国家として、例えば、メーカーなどの理解を得る努力が必要と考える。また、公共セクターや芸術・文化等に関係する仕事の情報も、子どもたちには必要であると感じる。
- 何時までもフリーペーパーでいいのか。学校と生徒に有効な情報なら対価があってもよい。いつの間にか、企業サイドの情報の中に包まれて身動きできなくなるとつまらない。学校側がこの情報誌を使いこなす力量を身に付けないといけない。学校側が対応できないなら、はっきりと地域に応援を頼むべし。情報のバランスを取る感性が課題と考える。
- キャリア教育に関する学校側の主体性が課題で、生徒を受益者として考えられる先生と、そうした先生を支える地域の役割は大きくなる。地域に企業経験者が入る、PTA 等との連携などを考える時代になったと思う。
- 現場の先生がこの情報誌を活用したのかをフィードバックしたい。フィードバックのプロセスに地域の方々が関われば、さらにこの情報誌の質を高めることができる。また、学校図書室にこの情報誌を置いて次の展開ができないか。
- 大企業、中堅企業、小企業、地元企業の情報がバランスよく入っていることが肝心。
- お金を儲けること(食べていくこと)に集中しないで仕事の仕組み、世の中の仕組み等を理解させる活動なら理解できる。お金やモノがどのように循環しているのかを学んで欲しい。
- お金を稼ぐことに興味を持つ子どもは頼もしく感じる。協調性も学んでいるようでキャリア教育は賛成。
- キャリア教育が社会のテーマで、学校から、家庭からのニーズがあることが分かった。この分野で活動する NPO や地域団体は少ない。このニーズを把握できなかったと考える、一方、子どもの未来創造協会やビジョナリーエクスプレスなどの企業はこの分野に注目。情報量の差を感じる。地域をより知る地域団体や NPO が一緒にできる余地がないかと考える。
- 学校が外部と情報交換するためのツールにもできるし、キャリア教育の重要性を親に伝えるツールにも考えられる。この二点からまず動き出していることは評価できる。
- 小学校 5 年向けの情報誌であるが、読み解けない子どももいるのではないかと思う。子どもたちを受け入れた企業からの情報のフィードバックと、保護者向けコーナー記事も欲しい。
- 子どもを受け入れる企業は、地域の情報を得る必要を感じていると思われるので、地域側がこのような情報誌に関わることは大切と考える。

<新谷さんのまとめ>

- 1 . 農業とか、日本的企業の特徴である製造業、中小企業の姿がこの情報誌にはまだ少ない。子どもの多様性を考えると、様々な分野の企業が参加できるように今後の研究、工夫に期待したい。NPO 的な活動、例えば、昆虫の採集、顕微鏡で観察するような活動から、生き物に興味を持って、それが仕事につながることもあるので NPO の活動も重要と考える。また、保護者向けのメッセージを設けたらよいとの意見は貴重であったと思う。
- 2 . 企業が、地域等に求めるニーズを、NPO、地域は理解するようにして欲しい。また、社会貢献を専門にしている企業人は少なく、企業側も地域のニーズを計りかねている。企業・地域・NPO がお互いに協力し合える領域をお互いに見つけ出す時期に来ている。
- 3 . 企業が一番関心のあることは、社員を社会にどのようにして参加させるのかである。どのようにしたら、ボランティアに参加できるのか、企業が社員にボランティア参加プランを示す時期に来ている。ボランティアは、社会を知る絶好の機会と企業は捉えている。一方、社員の理解度が充分育っていない状況もある。

以上